

## 編集室から

能登の巨星墜つ。訃報は突然飛び込んできました。県の公安委員長を務め、奥能登地域を主なエリアとする信用金庫の理事長であり、奥能登を代表する数馬酒造の前社長でもあった数馬嘉雄氏が若くして病に斃れ旅立たれました。それは余りにも唐突で、衝撃的でした。

氏とのご縁は浅からぬものを感じています。初めてお目にかかったのはどのような場だったかは記憶に無いのですが、能登空港を始めとする能登の活性化プロジェクトでは、毎回顔を合わせさせて頂いていました。そればかりでなく、自分の集落のごく近くから奥様がお嫁にいらしていること、氏の長男・嘉一郎さんが、私の次男と同年で同じ高校で学んでいたことなど、公私ともにつながりが少なくありませんでした。

ある日、氏が主宰する経済界の勉強会に招かれた時、決心をして参上したのをハッキリ覚えています。「いつまで茶飲み話をしているのか。何事もトライしてみなければ始まらない」と生意気にも檄を飛ばさせて頂いたのです。二度と呼ばれないほど嫌われる覚悟でした。しかし、その後の氏らの動きは素晴らしく、あっという間に銀座へ、能登とのご縁を結ぶための拠点として出店を果たされたのです。それが本紙でもご紹介している「のとだらぼち」です。後日、詳しい経緯をお聞かせ頂きましたが、こちらの意を汲んで頂いての行動に深く頭が下がる想いでした。

能登地震で壊滅的打撃を受けた輪島にある複数の酒蔵のために助かったお酒を仕込水運搬用のタンクローリーで回収し、自蔵のタンクを空けて貯蔵。税務当局との根強い交渉と併せ、多くの同業の再生に大きな貢献をされましたが、氏の口から語られることはありませんでした。

人懐こい顔を思い出しています。(は)



のと  
だらぼち

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川畠さんが「能登だらぼち」を引き受けて改装開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

のと だらぼち  
03-5537-3078  
17:00~23:00 日曜祝休

中央区銀座8-4-27  
プラザ銀座ビル地下1階  
(銀座外堀通りasics前)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2017/11  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>  
〒920-1167  
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217  
Fax 076-233-7375  
Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

2017/11  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

## 霜 月



熊本県人吉市にて  
by hama

今回は、糖質制限食がバナナダイエットの改良版ではない、という話でした。そもそも食事療法の長期にわたる有効性を示すことは、極めて困難です。餌を与えて飼育できるネズミと違って、自由に動き回れて何でも買ってこれるヒトに、一定の食品のみを食べさせ続けることはまず不可能だからです。そのうえ、元々持っていた食習慣を変えて新しい食事療法に切り替えようとする場合、ヒトには嗜好とか習慣とか依存性とかいった厄介なものがある、それらも強力な妨げとして働きます。

食事療法を一般受けさせるには、「なら、いくら食べても良い」とか「さえ食べなければよい」といった判りやすさ・単純さが必要になります。このコラムを読まれているような地味で論理的な話にジックリ耳を傾けてくださる方は、残念ながら世間では少数派です。そうなるといきおい、現実にはみられる事例を一目もつともらしそうに解釈して、都合の良い結論に導く手法が取られるようになります。

例えば「ライオンやトラなどの肉食獣が肥満していないのは、糖質を摂取しないからだ」などという説です。しかしそれは、食料を得る手段としてパワーと瞬発力に頼る道を選んだ生き物が、脂肪を蓄えると運動能が落ちて不利になるから食べ過ぎない本能を身につけただけの話です。

その証拠に、脂肪が邪魔になりにくい海洋生物では、低温の海に生きるトドヤクジラなどは糖質を摂らないけれど分厚い脂肪層を持っています。



## 濱のつぶやき 『未知との遭遇』

「遭遇」という語は宜しくない事に出あう意を含んでいる。表題の慣用語には「未知と出会うことは芳しくない」意味が含まれているのか。一方で人類は、科学技術に代表されるように未知なる世界を開拓し続けて発展を遂げてきたとも言えるし、行ったことがない土地への旅はワクワクするものだ。この矛盾や如何。

金沢への観光入込が絶好調である。週末は元より、平日においても、そぞろ歩く観光客が増えた。新幹線のみならず、県外ナンバーの車も増えた。

恩師から母校の交通計画研究会に誘われた。仕事はそのテーマからすっかり離れているので、一瞬迷ったが、恩師のお顔を拝見したさに行きことにした。

結果は驚きだった。ハツとする研究発表数件に出逢えた。その一つに携帯電話のビッグデータを活用して人々が何処から何処へ移動しているのか時系列で追う研究では、新幹線金沢延伸の前後で石川県への入込変化を明確されていた。なんと直接効果の約二倍の間接効果がみられ、新幹線とは無関係な関西方面からの入込も増えているという。超大雑把に言えば、地域の魅力などによって本来の三倍ほどの入込が発生していることになる。地域魅力つまりは地域ブランドのパワーの凄さや如何。

では、地味で論理的な意味で、炭水化物はどう考えればよいのでしょうか。まず単純糖質は、依存性の高さに注目すべきです。本能的な味覚として生まれながらに美味しいと感じるのは「単純糖質」と、少量でエネルギー量の多い「油」と、海から離れたおかげで貴重品になった「塩」の三つとされています。単純糖質を摂取すると分解の必要なく直ぐさま吸収され、即エネルギー源になるからです。長い生命の歴史の中でも、まとまって単純糖質が存在したなどというのは八チの巢の中くらいです。昭和に入ってからさえも、まだまだ砂糖は貴重品でした。一グラムは四キロカロリーで決して高くはないので、摂り方に気をつければ肥満の原因になることはないはずですが、繰り返しますが、問題は依存性です。本能に負けない大人の味覚を獲得して、素材を活かしながら薄つすらと味付けに使えば、最高の調味料です。私は外来で、人工甘味料をお勧めすることは一切ありません。

食物繊維は、いまだに謎が多く残された食品です。少し前までは、人間の体内では消化されないのでエネルギー量はゼロと言われていました。しかし一部が腸内細菌に分解されて、脂肪酸として吸収されエネルギー源になることが知られてきました。ただそれは、蓄積されることのない即座に使われるエネルギーのようで、少なくとも肥満の原因にはならないようです。そして現代人が生活習慣病から身を守る上で最も必要なのは、糖質を制限することで、最も必要なのは、食物繊維の源である野菜をもっともつと摂ることだと思えます。



【プロフィール】  
（いがき としお）金沢大学北潟寮で、濱さんの二年先輩でした。濱さんは、とつても怖かった。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松でヌクヌクしています。

これを縁に、今年の地域づくりシンポジウム「地域づくり円陣」では、地域ブランドディングをテーマに企画することになった。ブランド化については講演・解説もしているが、ここは知ったかぶりをせず、年の半分は海外クライアントのために国外に滞在されているというブランドディングプロデューサーの方を招聘し、企業・個人ブランドの構築の極意に触れることにした。それを基に地域ブランドディングへの応用を探ろうというのである。時は師走三日午後。場所は、しこのき迎賓館にて、多くのご参加をお待ち申し上げたい。今から当日が楽しみでならない。

知ったかぶり程怖いものはない。何でも知っているつもりで下した「正しい判断」は、自らの「知っている範囲」の中でのみ成立する正しさに過ぎない。

世の中は実は、自分が知っている範囲よりも遙かに広大に拡がっている。自らが下した「正しい判断」が実は「自分の知っている限りにおいて」という大前提が付いている。多くの大科学者ほど謙虚であるのは、このためだろう。

自分が知らない、或いは知っているつもりになっている領域からの誘いは、実は自分を上げる格好のチャンスであるが、そうとは知らず人は、知らないものは怖い」という生物保全の保守的本能が先に立って怖気づき尻込みする。

人間の成長とは、気付かないうちに発動している動物としての本能を、意図して乗り越えることなのかも知れない。

乳幼児の親子におけるメディア活用状況が、民間の研究機関により調査され、その結果が公表された<sup>1</sup>。次のようにまとめられている。

- ・ 4年前と比較して子どもがスマートフォンに接する機会が増加した
- ・ 母親は、子どもの過度なメディア利用については懸念を示しており、一定の配慮や工夫をしながら使わせている

以下に、調査結果に関する私見を述べる。

4年前と比べて、スマホが一般化し育児にも関係する場面が増えていることは、本調査結果を見るまでもなく明らかなこと。しかし、育児への浸透の水準は私の想定よりも低く、消極的選択をしている親が多いと感じた。

0歳後半～6歳児がスマホに「ほとんど毎日」接している割合が2割という結果は、驚くべき少なさだと思う。「写真を見せる」84.4%、「母親や子どもが撮った動画を見せる」76.2%も決して高いとは思えない。

スマホによる子どもへの悪影響の懸念、および育児活用への後ろめたさがあり、過度なブレーキがかかっているということが考えられる。本調査においても、子どもにスマホを見せる（使わせる）ことへの抵抗感はとも高いという結果になっている。

見せ方（使い方）を誤ると子どもに悪影響が生じるのは、絵本やテレビも同様である。むしろスマホネイティブ（生まれながらにしてスマホが身の回りに存在している）世代の親として、子どもの成長段階に応じた積極的な見せ方（使わせ方）をよく考え工夫しながら育児に採り入れていくことが大事だと思う。

一方で、社会的望ましさバイアスにより、回答結果が実際よりも低めに出ている可能性も否定できない。また、サンプルが首都圏のみであることにも留意が必要であろう。さらには速報版ではなく本報告書で明らかにされるであろうが、回答者の属性別分析も非常に重要となる。

いろいろ書いたがとても意義のある調査だと思う。今後のベネッセのビジネスモデルの方向性と併せて、もう一步踏み込んだ提言を待ちたい。

注1：ベネッセ教育総合研究所「第2回 乳幼児の親子のメディア活用調査 速報版」2017年10月  
<http://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=5208>

2017年も早くも11月に入り残すところあと2か月。少し早いですがこの1年に学んだことをシェアさせていただきます。

## 1. 選択と集中

飲食事業において一番のリスクはなんでしょうか？食中毒、食材の高騰も確かにそうです。しかし、現在この業界における最大のリスクは『人材』なんです。つまり人材不足ということです。そんなのどの業界もそうだという意見もありますが、この業界は“調理人”という特殊技術を持った人間がいなければ成り立ちません。また、これまでの低価格化路線の弊害もあり、【労働時間が長い、立ち仕事で疲れる、にも関わらず対価が低い】ことから、若い人材の担い手不足が顕著であります。私の会社でも4店舗の直営と1店舗の経営代行をしていますが、業容拡大よりは・事業としての競争優位性が高い・ROAが高い・将来的な社会的構造問題の解決にアプローチしやすい業態に特化して集中させていこうと考えています。

## 2. チームとしての地域づくり

今年はどこかでも書いたと思いますが、地域商社という言葉がこの2～3年流行言葉のような使われています。商社には、[プロデュース・生産・流通/チャネル・営業]といった機能が必要なわけです。それをその地域の人だけで本当に賄えるのか？という疑問がこの1年ありました。生産地と消費地を密接につなげるには、それぞれに役割を担う専門機能が必要なのです。9月に創業20年の能登の料理店のバイオニアでもあるお店を引き継ぎさせていただきましたが、そのおかげもあり様々な能登の方と交流させていただくことができました。そこで感じたのが、「おれは能登の営業マンであるべきだな」ということです。能登と東京で同じ思いを持つ人間が競争ではなく、協奏していくチームをつくると決めて行動しています。

## 3. 地域づくりのマネジメントレイヤー

大きく成長した企業にはその顔となる人間が必ずいます。古くは松下幸之助さんから始まり、ダイエーの中内さん、ファストリの柳井さんやセブン&アイの鈴木さんといった存在です。私が会社員として長く務めた会社の社長も正にそのような存在の方です。世間で多く語られるのは、その壮大なビジョンや強烈なリーダーシップと言われますが、いわゆる成功者と呼ばれている起業家の方々にインタビューさせていただいた経験から言いますと、他人を充てにせず自身がとことん突き詰めて考え、それを信じて徹底的にやるという点をどなたも共通して持ち合わせていらっしゃるように思われました。昭和の政治家のような豪放さは以外と見受けられない事に驚きを持ったという記憶があります。しかし、『地域』というユニットにおいては『組織もマネジメント』も違ってきます。

企業と違い様々なステークホルダーが存在する地域においては重要なのはあっと驚く企画力や強烈なリーダーシップが最重要資質ではなく、顕在的・潜在的な問題を提起し、利害関係を超えて全員で全体最適の解に導くといったファシリテーションの能力が必要なのだと感じる事が多々あります。それを私の地元能登で実践されておられたのが、先日能登の地域づくり・産業づくりの夢半ばで亡くなられた数馬嘉雄さんです。公私関係なく、能登のために日本中を飛び回り、新たなチャレンジに向けて地域との協議に奔走する。そして戎様のような笑顔で『川島君。今の能登に必要なのはなんだと思う？』と問いかけてくる。能登にいる人、能登の外にいる人が嘉雄さんと同じように、能登を幸せにするために必要なのはなんだ？を問いかけ続けることができればと心に刻んだ一年でした。

『富士の国から ~大魔神のたび~』富山への旅 2017.09.01~03  
静岡県小山町まちづくり専門監 溝口 久

7年ぶりに富山に出掛けた。「全国まちづくり交流会」が主たる目的だが、せっかくだからと小山町内にある豊門公園に戦時中に供出され台座のみ残る日比谷平左衛門の像を再建すべく、そのブロンズ像の製作を依頼した平和合金に行くことも、その目的に加えた。像の台座には「明治三十三年以来、日比谷平左衛門君の吾が富士紡績株式会社の為に、尽瘁せられたる多大の功労を表彰せんか為め、有志者相謀り君の銅像を建設して之を不朽に伝ふ、明治四十年八月」に書かれ、その横には「日比谷平左衛門銅像供出の碑」がある。これを72年経て今に再建するのだ。現在、像のある豊門公園は修景工事中であり、これを機に目に付く位置に写し、豊門公園の持つその歴史性を感じてもらおうと思っている。

製造工程の説明や現在作成中の他のブロンズ像を見させてもらった。学生の時に曲りエルボの木型作製から砂型づくり、溶けたアルミを鑄込む一連の作業をしたことがあるので、製造工程はよくわかった。

日比谷平左衛門像の実物はなく、あるのは写真のみ。作家は靖国神社にある大村益次郎像をつくられた大熊氏広という大物彫刻家だ。他にも維新に功のあった人々ブロンズ像を多く制作し、代表作に「福沢諭吉坐像」「有栖川熾仁親王像」「小松宮彰仁親王像」がある。

大熊がどんな想いで、そして施主である明治の富士紡績がどんな期待を寄せて造らせたのかに立ち返り今に甦らせたいと思っている。その5分の1の粘土模型ができていた。顔も大切だけどフロックコートの裾の波、肩口のシワが気になる。これは実物を着て観察してみないと 写真だけではリアルにならない。どこまで現代の作家ができるか、殖産興業時の歴史風味を出したい豊門公園の大事な存在になる日比谷平左衛門像の出来が気になる。

高岡駅から富山駅に向かい、駅前に立つと随分とスッキリ、イカしたデザインになっている。LRTが先に見え、バスの待ち合いは緩やかなカーブを描き、空間の抜けもいい。歩道には自転車レーンが示され、海外で見るようなサイクルステーションがある。LRTと自転車、街中への車の乗り入れを少なくさせる街の意思を感じる。全国まちづくり交流会の会場であるホテルグランテラスに入るとレンタサイクルが2台置いてある。これで翌日午前中市内を走り回ることにした。「ガラスの街富山」とは知らなかったけど、その集大成と言うべき富山市立ガラス美術館がある。立山



連峰をイメージしたという隈研吾のデザインだ。この日は8月26日にオープンした内藤廣デザインの県立美術館を見るのがメインなので、ガラス美術館で時間も脳エネルギーも使うのを避けて、美術館に足を向けた。

その道中にまたも気になる建物発見。高志の国文学館がそれだ。アルミのダイキャストを外壁に纏い深い軒が特徴的だ。これもただ者ではないなと中に入るとシーラカンスのデザインであることが紹介されており、数々の建築の賞も受賞されていた。こども内覧は省き、目的地に向かう。

またまた、気になる建物発見。芝園小中学校、これにも中部建築賞の銘版がつけられていた。中庭にあったてづくりのバレーアタック養成機、遠投養成機が面白い。子供たちは夢中でやっていた、遊び感覚あるこれら器具を使って未来のバレーと野球のプロプレーヤーが生まれたら面白い。

県立美術館の9時30分開館と同時に入るつもりが10時を簡単に回っていた。

美術館といえば、敷居が高く疲れるというのが伝統的な美術館の姿だ。小生が工事を担当した静岡県立美術館もその口だ。ところが金沢21世紀美術館あたりからアートを楽しむ、体感する。そして気の効いたカフェやレストランがあり、アートのある楽しい時を過ごすような潮流に変わってきている。富山県立美術館もまさにそうだ。チャンネルの風景を中に持ち込んだ開放的なデザイン、内装はやり過ぎなくらいに木を使っている。妹島和代の研ぎ澄まされたデザインの金沢21世紀美術館に比べおおらかな空間に包まれ、展示によって容易に空間を変えることができるつくりになっている。屋上にはアート性の高いオリジナル遊具があり親子連れには大人気だ。眼下にはチャンネルがある公園があり、スタバも立地して行列をつくっていた。これらが富山駅から徒歩圏内にある。新幹線開通を機に勢いを持って変容していている。有名になったLRTはこれまで駅をはさみ連続していなかったが、高架により連続になる。街中の移動が相当に楽になる。ほめ過ぎかもしれないがアメリカの人気都市ポートランドに近い気がする。金沢ではなく富山がこれから面白くなりそうだ。強く再来したいと思う都市である。

